

山本壮一郎宮城県知事とのインタビューは正に劇的な展開の中で実現したのであった。

中日ドラゴンズの招待を受けて仙台入りした5月21日、20年来のつきあいのある林暉仙台通産局長と通産省出身で軽金属押出開発の常務である佐藤武男さんが仙台に里帰りしてきたこともあって3人で仙台のネオン街を飲み歩いたりした。

本来なら、林仙台通産局長を通じて山本知事にアポイントを取るべきところを、わざわざ沖縄国際大学の宮城辰男教授を通じて東京女子大の伊藤善市先生から山本知事へのインタビューの申し込みをするという手のこんだ方法を選択したのであった。

これは、伊藤先生が山形のご出身で、東北の振興開発について長年各種審議会の会長や委員などの要職につかれ、山本知事から絶大なる信用を受けておられるということを承知していたからである。

山本知事が翌日訪韓される前日の5月24日でハードなスケジュールの中から10分間の時間をさいてくれるということであったのが、ついに50分、インタビューの時間にあてて頂いた。

絶えず秘書氏には申し訳けをないことをしていることも悪とせず、あくことなく、全国行脚をつづけるつもりである。その一歩として山本知事とのインタビューの内容へと読者をご案内申し上げる。

—— 本日はご多忙なところインタビューに応じて頂きましてありがとうございます。

実はプロ野球の中日ドラゴンズの招待を受けまして、去る5月21日に参りましたが、せっかくの機会ですから、是非知事にお逢いしたいという衝動にかられまして、山形県ご出身でしかも東北ブロックの地域経済開発問題についての権威者であります伊藤善市東京女子大学教授にその旨電話でお願い致しまして、実現させて頂いたことを心よりお礼を申し上げます。

実は仙台には、東北自動車道が開通したその月に1度お伺い致しておりまして、今度で2度目になりますが、今から400年前頃に、琉球王朝の船が伊達藩まで台風か何かで漂流しまして、それを助けて頂き、島津藩を通して沖縄に送り返したという歴史がありまして、そのお礼の言葉を知事に是非申し上げたいということと、さらには四全総においては第2回会議事堂や、迎賓館別館の誘致や第2国土軸に意欲的な姿勢を持っておられるので、その辺についてのお考えと将来展望を是非伺い致したいということからであります。

今日は朝5時半から、宿舎のワシントンホテルから県木のケヤキの茂る青葉通りから広瀬川を通過して伊達政宗公の青葉城址を散策しておりますと、ちょうど今日が命日だということで日本酒を1本買いましてささげて参ったところであります。

山本知事 そうでありましたか、どうもありがとうございます。

今年は戊辰の役からちょうど3巡目のツチノ工、辰の戊辰の年に当たっているんですよ。

日本の近代国家は戊辰の役以降の明治維新からはじまったわけです。

戊辰の役については東北地方では、会津藩を中心に奥羽越列藩同盟が結成されましたが、いずれも鎮定されまして、賊軍になったわけです。賊軍にまわったのは宣撫の意味もあったのか、明治新政府は、大久保利通などは随分長く東北の視察をやりまして、明治初期においては東北開発に熱意を持っていたんですよ。

仙台には野蒜という地域がありますが、明治初期の頃までは横浜も神戸もまだ大きな港になっておりませんでした。それより以前にこの地域に日本一の大築港計画を立てまして、オランダから有名なファンダーンという土木技師を招いて工事にかかっているんですよ。それが残念ながら外洋に面しておりまして、いまでは仙台港が出来ておりますが、明治の初期頃まではオランダの技術をもってしてもその計画も挫折せざるを得なかったのです。

しかし、成功したものもあるんですよ。同じオランダの技術者なんですが、福島県の安積疎水などはそのいい例ですよ。

さらに、例えば戦前は東京が第1師団なら仙台が第2師団、大阪が第3師団におかれておりましたし、また東京第1高等学校なら仙台は第2高等学校、京都が第3高等学校というふうに東北重視の姿勢は明治の初期まではあったわけです。ところが、明治10年に西南の役が起り、やがて日清、日露戦争が起り、段々と国が西の方にむいていったんですね。

もう1つ東北重視の例を申し上げますと、日本の鉄道はまず東海道線が出来て、山陽線が出来ると前に、東北本線が2番目に出来ているんです。

東海道本線が明治22年に、東北本線が2年後の明治24年に完成をみております。このように明治の初期の頃までの日本政府は東北重視の姿勢があったんですが、先程申し上げましたように歴史的な経過の中で東北というところは取り残されて、未開発地域ということに長年甘んじてきたわけです。

そこで「河北新報」という東北6県をブロックとした新聞があります。白河以北、一山百文という言葉がありますが、それは正に東北の後進性を軽侮する言葉で「河北新報」というのは、そのような東北地方へ汚名を挽回するための東北開発のオピニオンリーダーになるんだということから、創業者があえて河北という名前にしたんですよ。

つまり、明治以来、長年に亘って白河以北は日本列島の中では後進地域の汚名に甘んじてきたんですが、ただそうこうするうちに東京、福岡間の日本の第一国土軸が明治以来の開発と戦後の高度経済成長によって、開発されてきた結果、それが今じゃ飽和状態になっているんですね。

その最たるものが東京都なんで、現在では東京にあらゆる機能が集中しすぎていることから、今や都市機能を分散しなければいけないという議論がされているわけです。われわれ東北は長年、日本の国土の2割を占め水資源や勤勉な人的資源も豊富ですし、それをほっておく手はないじゃないかということから、東北の開発をさげびつづけているわけなんで

す。私が知事に就任しまして、ちょうど2年後の昭和46年に東北新幹線の起工式を行ないまして、まだ東京駅までは結ばれていませんでしたが、概成をしたわけです。

また、昭和38年度に新産都市の指定を受けた仙台港が、昭和46年に開港したわけです。さらに、仙台空港も長く自衛隊が使用していたのを民間専用空港として整備し、昭和47年にジェット旅客機の就航が始まりました。

また、この時期に東北自動車道も開通するなど、ようやく地域発展のための基盤整備がなされ、勢いが出てきたわけです。以来私が絶えず強調しているのは、後発のメリットをお互い生かそうじゃないかということです。

つまり、開発前進地域というのは、過密の弊害や公害の発生など、かつて経験したことのないいろいろな問題が起きております。

開発して都市が大きくなり、経済が盛んになればよいという論理が優先されてきた結果、多くの社会問題が起きてきているわけですが、われわれは、これから後発として開発をすすめていくわけですから、前者の撤を踏まないような理想的な開発が出来るんじゃないかと言っているわけです。

これまでの第1国土軸にかわって、21世紀の日本の国土を調和のとれたものにするためには、東京、仙台、札幌間の第2国土軸を建設すべきだと主張をしているわけです。東京、仙台、札幌の間がちょうど1,000キロありまして、これからは東海道線から東北新幹線を軸としたところの開発を積極的に進めていくべきなんですよ。

四全総の中間報告では、東京一極集中型にしたいという発想でしたけれども、それは地方が大反対を致しまして、最終的には多極分散型という形になったんです。

われわれは、何も東京はいらないといっているわけではなくて、東京は情報、金融都市として世界にその役割を果たさなければいけないし、東京だけに都市機能がすべて集中していると、東海沖地震みたいな規模の地震が起きると東京の機能は完全に麻痺することになるんじゃないかと言っているわけです。そうすると、日本の機能が全部麻痺することになっては、日本が世界に果たしている役割が果たせなくなるので、そのような被害を防ぐためには首都の機能を地方に分散して、第二国土軸を東北につくり21世紀における日本の国土づくりの軸にしようという構想を打ち出しているわけです。

首都機能を分散するために、先程話のありました第二国会議事堂を仙台に誘致し、最高裁判所を山形にとか、迎賓館別館あるいは国際情報センター等の機能などを具体的に提案をしているわけです。

これらを1つの議論の種として提供して、後発地域は白地に絵を描くように理想の開発が出来るんじゃないかというのがわれわれの主張であります。私も20年間知事をやっております。それだけ肌を感じて東北の時代が来たという実感が出てきております。近く東北の時代がくるなあ……ということは、われわれがそれをつくらなければいけないことになるわけですが、そのようなことを肌感ずるようになったのはこの1両年なんです。

これまでに東北新幹線、東北自動車道、港湾、空港の整備が進み、全国の目が東北に注がれ

るようになってきているわけですが、これから東北の時代が到来するという感じを私はしてならないわけです。

—— 私は、昭和 75 年度を目標とする第 3 次宮城県長期総合計画を拝見させて頂きました。その中に、公園緑地面積が現在 1 人当り 6.9 平方メートルで全国平均の 4.5 平方メートルを大幅に上まわっておりますが、さらに、昭和 75 年度には 25 平方メートルにしていくという意欲的な数字が出ているんですね。

戦後、植えた青葉通りのケヤキが飛行場の滑走路をつくるつもりかとひやかされたということもあったようですが、現在では緑が大通りをつつみ、それから広瀬川青葉城址一帯の緑を散策しながら、実にうらやましいという感じを受けました。その緑を 4 倍近くに 21 世紀には増やして行こうという行政の姿勢が大変すばらしいと感動をしているわけです。

私は宮城球場で一度はタクシーで行きました。そのときは 2,200 円くらいの運賃でしたが、翌日はワシントンホテルから歩いて行きました。かなりの道程ですが歩くことによって道路や緑や建物すべて目にやきつけることが出来、また運動のため足腰を鍛えているなどの理由からですが、実にすばらしい活気に満ちた街が出来るという感じですね。

J R 仙台駅から球場までの整備中の道路や高層ビルが街と調和した形で建設され、また、建設中のものがありましてすばらしいんですね。緑が多いところで、東京で定年を迎えた方が仙台に土地を求めて住みつく傾向が多いということは実感として分かりますね。これからはテクノポリスであるとか、宮城県は 21 世紀を背負っていくであろう産業の展開がなされるという感じを受けているわけでありませぬ。

東北自動車道が開通し、新幹線ですと東京から 2 時間の距離ですが、これまで東京に比較して立ち遅れていた東北地方が仙台を中心として、先程第二国会議事堂や迎賓館別館等のお話がありましたが、遷都・分都の時代がやがてはきて、仙台が大きな役割を果たすのではないかという期待を致しております。

今日（5 月 24 日）の新聞にも政府は 80 の政府機関を地方に移す方針を決定したという報道がありますが、正に山本知事以下皆さんがご奮闘されてきた熱意が中央政府を動かし、これからロマンに満ちた仙台が築かれていくという期待を私は持っております。

歴史はくりかえされるわけでありませぬが、京都から鎌倉、大阪、東京と首都が変わってきたように、やがては東京から仙台に首都が変わるという時代がくるかも知れませぬね。

今日知事に差し上げました遷都・分都の出版物は、私の友人の小関内外情報調査会編集部長から発売前に入手しましてお持ちしたわけです。その中には陛下、京にお戻り下さいというふうに書いてありませぬ、また日本は地方で伸びるというタイトルもついております。

今後遷都・分都論議が四全総がまとまったのを機に、全国的規模で議論が展開されるとよいと思ひますね。

どうか知事が持っておられる構想を是非とも実現して頂きたいと思っております。

山本知事 たしかに、東北というのは可能性が非常にありますが、それをどう生かして 21 世紀を先取りしていくかが大きな使命だと思っております。

先程も申し上げましたように、都市といい地域といい、そこに住んでいる人達が生涯にわたって生きがいを感じるような都市でなければいけないと思っております。

これまでの地域効率論と生産性の論理という経済の論理で支配されていたんですが、勿論それも必要ですが、それにプラス人間の論理、生活の論理というものを踏まえた地域論でなければいけないというのが私の基本的な考えなんです。

人間の論理から出てくるものが、そこに住む人達に本当に高度な文化生活があり、しかも安全な地域であるということです。さらに快適な空間を持ち、しかも豊かな生活をうるためには、産業経済の発展を図って行かなければなりません。これからは情報化時代ですから、情報網の整備を進めていかなければなりませんし、あるいは国際交流拠点としての基盤をつくらなければいけません。しかし、それらは極端に言うならば手段であって、目的は人間の生活をよくするというものですからね。

これまでの地域論というのは、どうも経済優先主義になっておりまして、大事な人間生活面がどうも弱いというのが或いは忘れ去られているように思いますね。

—— それは昭和 30 年代後半の新産都市指定や所得倍増論などが出たころはそれでよかったんでしょうけれども、その時期、時期に応じた政策が必要でありますし、また知事がおっしゃったような人間優先の開発というニーズが高いわけですから、これからはおっしゃるような方向を目指していくのが、これからの日本でなければいけないと思っております。

現在、貿易摩擦や自由化問題などいろいろ出ておりますが、それは日本人があまり働きすぎるところに起因している面が大きいわけですから、これからは人間優先の地域開発でなければいけません。

それから、来年 4 月には仙台市も全国で 11 番目の政令指定都市を目指していろいろ準備をすすめているようでありますので、知事からはこの政令指定都市に向けての見通しや抱負などについて伺い致したいと思っております。

この政令指定都市が実現致しますと地域活性化に連動してきて、経済的インパクトは大きいものがあるんじゃないかという気が致します。

政令指定都市になりますと、そこに住んでいる市民や県民がそれを誇りとして、それが 1 つのエネルギーとなってくるんじゃないかと私はみているんですがいかがでしょうか。

山本知事 おっしゃる通り、地域を引っばっていく中枢拠点都市が必要ですね。仙台の場合も東北の中枢機能は持っていますが、政令指定都市になるためには人口要件が足りなかったものですから、周辺の泉市と宮城・秋保西町とに仙台市と共同歩調をとりながら働きかけ、この 2 年間で合併をやり遂げることができました。

私は、長年地方自治をやっていて、市町村という基礎的な団体が力をつけないと、地方自治の発展はあり得ないと考えております。もう 1 つは県といっても抽象的な県はないんで、仙台と 1 市 2 町が合併する前には 74 の市町村があっはじめて宮城県があるわけです。

私としては、県土をいいものにしなければいけないし、また県民の幸せや福祉をよくしなければいけないことを考えましたときに、仙台の市民とか何々町の町民とか、そういうも

のを除いた県民というのではないわけで、市町村民が集まって宮城県民なんでしょう。従って基本的にはそれぞれの人が住んでいる市や町や村をよくすることに県が総ゆる援助をするするという中から私の責任でよい県土をつくり、県民の幸せを実現させるという発想なわけです。

つまり、市町村を大事にしなければいけないと考えております。市町村が基本的な団体として、自治の基本であるという考え方に立ちますときに、私は県の権限が政令指定都市に移って、財源が減るということもあります、21世紀を展望した東北・宮城の発展のため政令指定都市の実現に向けて私は先頭を切って取り組んでいるわけです。

現在、県と仙台市との間で政令指定都市に向けての権限委譲の問題を詰めています、この秋には政令指定都市指定の政令が公布され、来年4月に政令指定都市が誕生することは間違いないと思います。

東北新時代の夜明けのこの時に、仙台市が政令都市となることは非常に意義のあることであり、タイミングの良いことです。

—— それから、昭和75年までの県長期総合計画の中で、県民所得を昭和75年には320万円にするという随分思い切った数字をお出しになっているという感じを素直に申し上げて受けたんですが……。

山本知事 そうですかね、私は無理して増やしたつもりはないんですよ。現在においても1人当りの県民所得は全国平均に近い状況にあるんですよ。

また、私は県民所得だけでその地域の物差しにするのはどうかと思いますね。

—— それはおっしゃるとおりですね。

山本知事 それは総合的な住み良さの指標がなければいけないわけですからね、ロンドン大学の有名なロブソンという学者が「世界の大都市」という名著を書いておりますが、今や世界の大都市に住んでいる人達はあらゆるがまんの上にはじめて成り立っているという状況だと書いてあるんですね。

つまり、都市機能は高いかも知れないが、そこに住んでいる人は、交通渋滞や、住宅難、公害、犯罪の発生などあらゆるがまんの上にはじめて生活が成り立っているという状況だと思うんですよ。

東京の都市機能は高いし、また所得も高いわけですが、生活実態からいうと東京都民は幸せかというとは決してそうではないと思っているんですよ。

—— 私は先程申し上げましたように、各地を取材していく上において最も注意をして数字をみますのは所得ではなくて、公園緑地なんですね。

沖縄が現在1人当たり3.5平方メートルで、全国平均が4.5平方メートル、宮城県の場合は全国水準をはるかに上まわる6.9平方メートルになっているんですね。

それをさらに西暦2000年には25平方メートルにするということは、住み良さを象徴するものだと思っています。やはり県民所得水準が高いということよりも、緑がいっぱいあって、文化的施設が整理され、そこに歴史が学べれば最高の住環境だと常時私は思っております。

す。

所得水準でもって人間生活のよさ、悪さを計るバロメーターはまちがっておりますね。

そのような意味で仙台は2度目ですが、大変すばらしいと思っております。是非とも知事さんにお逢いして、21世紀に向けたロマンを伺い致したいと思ひまして、山形県出身の伊藤善市東京女子大教授に無理にお願いして、インタビューが実現出来たことを大変うれしく思っております。

山本知事 先程も申し上げました通り、物事にはタイミングというのがありまして、冒頭に申し上げましたように戊辰の役から3巡までの120年間、待たなければそのタイミングはこなかったわけです。

それには中央の政府の問題や、その他の要素もいろいろあると思いますが、そのタイミングというのは絶えずあって、一時、大都市ニューヨークの没落が騒がれたように、先発地域には様々な問題が生じ中にはあってはならないことですが滅びる道を歩むことになることも度々ありますね。

大変曖昧な言葉になりますが、エジプト、メソポタミア文明にみられるように歴史の必然性とでも申しましょうか。

ですから、私は沖縄の方にも大変ご苦勞を頂いておりますが、沖縄もどちらかと言いますと後発地域なんでしょうけれども、しかし、後発であるということはやがては出番がくるんだということですよ。

いずれは狭い日本はやがてはどこも過密になるというぐらいの気持ちを持てるように、1つマスコミの方だから、県民の意識の高揚を図っていかなければいけませんね。

それからもう1つは、これからはリゾートの時代ですから、あれだけのすばらしい海洋資源があり、しかも本土にはない熱帯、亜熱帯の環境を生かした沖縄の活性化の道があるんじゃないかと思ひますね。

沖縄はあれだけの多くの基地をかかえられて、非常にご苦勞があるんだと思ひますけれども、マイナス面だけを強調して政府に助けてくれという、哀訴嘆願型は駄目なんですね。

東北でもやっぱりそうなんです。東北は遅れているから助けてくれという他力本願型で、中央哀訴嘆願型の姿勢をすてると口をすっぱくして私はいっているんですね。

—— しかし、四全総をまとめられる段階においても、また四全総が出来た後についても東北地方は多くの資料を頂きまして、拝見しておりますと極めて能動的にこれからわれわれの時代がやってくるんだという意気込みをひしひしと感じられますね。遷都論が盛んになってきたことはよいことですね。

山本知事 やっとそういう気運が出てきたんです。この前もエコノミストで5月にはいつて座談会をやりましたが、大阪代表が関西経済連合会の宇野会長と名古屋代表として東海銀行の加藤会長、どういうわけか仙台の代表に私が出まして座談会をやりましたが、これから遷都論やいろいろ議論が出来ますけれども、今われわれとしては、東京にあれだけの機能を集めているところで自然災害があったときに日本の機能がマヒしたら困るんじゃないかと

いっているわけですよ。

ですから万が一の場合サポートシステムを仙台に持ってこようということです。このためには東京から近すぎても、遠すぎても困るわけで、ちょうど300キロの仙台がその役割を果たせると考えております。

これは、国土審議会の計画部会ワーキンググループの下河辺さんが盛んにそれをいっているわけですよ。

また、金丸さんも仙台はいよいよと言ってくれているんですね。

—— どうも時間がすぎているようですので、この辺でインタビューを終わらせて頂きます。

自治新報 昭和63年6月号掲載